

帝国軍隊に於ける學習・序
富士正晴 未来社

帝国軍隊に於ける學習・序
富士正晴 未来社

帝国軍隊に於ける学習・序

1964年9月10日 第1刷発行

定価380円

著 者 富士正晴

発行者 西谷能雄

発行所 株式会社 未来社

東京都文京区小石川三ノ七
振替東京87385電話(811)6966

ふじ活版 萩原印刷 富士製本

目次

童 貞 3

傍観者 77

南雄の美女 101

崔長英 123

足の裏 157

帝国軍隊に於ける学習・序 177

死ぬ奴 207

童

貞

1

わたしが未だ戦に出ない前、北支の或る都での事件が耳に入った。その真疑はいまだに詳らかでないが、有りそうな事と言えは言える事柄のようである。それはその都で難民や孤児を収容していたヨーロッパの或る国のカソリックの尼僧院を日本軍の或る大隊が襲撃したという事件である。なるほど難民は敵国人と言えは言うことが出来たであらうが、その尼僧院は日本の側の国のものであったことがおかしい。しかもその大隊の攻撃目標はそこに収容された難民の中の敵であったというより寧ろそこで難民や孤児の世話に当たっていた尼僧たちの、しかも露骨にいえば股間にあつたらしいことが伝えられた。大東亜戦争と誇称されたあの戦が未だ起っていない以前の話である。当時わたしはこの話に非常な悪感と恐怖と哀憐の気持を感じて、それが後々までわだかまりとなって残った。悪感是不法な行為に対するそれであり、恐怖は人間（敢て日本人のみという気持は今のわたしにもない）の粗暴さについてのそれであり、哀憐は

襲われた青い眼の尼僧たちに対するものというよりは襲撃し尼僧たちを強姦し終った日本の兵士達に対するものであった。これはおそらくは人の誤解をまねきそうである。

わたしはその時、或る男の体験（―）を思い起していたのだった。その男は医者であった。そして或る病院の中の独身寮の一室に住んでいた。三畳そこそこの部屋、天井が高く一方が一間幅の窓、その反対が小さなスリ硝子の覗き窓のついている扉、そして一間半の壁が両側の隣室との間をくぎり、セメントの床が足元にある。小さな机が窓の近くに、ベッドの枕元にある。お粗末な椅子。机の上には灰皿と、四、五冊の医学書、ベッドを壁に片よせてひつつけてあると、何とこの室は長細く、寂しく、さくばくと感じられるのだろう。薄団は固い。そして白いカバーがかかっている。ザラザラとする冷いその感触。そこでウィークデーを送るのである。ベッドに寝れば見えるのは扉ばかりだ。そして扉の覗き窓にはぼんやりと廊下の光がうつる。実に健康な頑丈な体を持ち合わせ、下手に文学書などを読まないその男は性慾をそらす方法をもたず、またその性慾は文学愛好者のある者のそのように歪んではないのだった。その男はマルキストではあったが、あまり本を読む方ではなく、むしろ耳学問の直観派に近かった。しかし、その頃はマルキシズムも弾圧されつくしていた（まあ、それは今のところ重要ではない）。その男には或るダンスホールでしりあつたダンスサーがあった。恋人などというよりは寧ろ情婦であつたのだろう。その二人が末には結婚を考えていたかどうかということもこの際重要ではない。ただ二人がお互に對して貞潔であつただろうということは考えられる。それは理屈からではなくお互の体が良くマッチしたからだろうと思われる。お互の精神がお互に了

解し合っていたかどうかそれは判らぬ。この男がそのダンサーの話をわたしにしたのはたった一回でしかない。そしてその話は恋愛の話でも、猥雑の話でもないから、そのダンサーが何という名やらどんな経歴やらどんな容姿やらどんな心情やら、どうして知り合ったのやら判りっこはない。いわばわれわれの話の中にふいに実に自然に女房の話がとび出してきて、その女房については何らの説明なしに話が進行し、終了するように、その男の話の中にダンサーが現れ、何らの説明なしに行動し、そして簡単な話の終了とともに消えてしまったに過ぎない。亭主にとって女房が説明を要しない日常茶飯の具であるように（男女同権論者を怒らせぬために一言さしはさめば、上の言葉の逆は必ず真である）、その男にとってもダンサーは日常茶飯の具であった。そしてその男の週末にとって彼女ほど心から願望されたものはなかったのである。願望されることの光榮。

話を始める前その男はたいくつそうにトランプを繰ったり切ったり一人占いをやっていたが求める結果が中々に得られず、遂々中の一枚を順番の中から除外して適当にやってのけた。

「ついにこのクラブの3の奴が邪魔をしたな。何事でも同じことだな。一カ処つまると全部動きがとれなくなる。人の体でも政治でも同じことだ。一カ処悪いとそこが命取りになりかねない。戦争でも同じことだ。小さな戦闘でも同じだ。軽機でも同じだ。おれが生きていることだって偶然みたいなことだ。レーニンが……」

そして言いさしてカラカラと笑いながら実に魅力ある開けっぴろげた眼でわたしの方を眺め、何か注意深くわたしの青い顔に眺め入った。

「原さんなんかどうですか。性慾どうです？」

そのようなことを不意に訊ねるのでわたしは返答のしようもなかった。わたしはやっと未青年期を離れたところだったし、売女の街へ出掛けてゆく勇氣も金もないところだった。そこへもってきて、氣はづかしさと読書と極端な少年風の自尊心から、今となってはわけの判らぬ不可解な話だが、充分の悪計と状況判断と妊娠に対する恐怖と、結婚などというさまざまな窮屈な結果にならぬ用心と、有無をいわせぬ神速とでもって、既に童貞は失ってしまったに不拘、自分の両親の間にはそれがないと信じ切っていたような少年期をもっていただけに、わたしの性慾に対する態度は甚だ不健康で奇妙なものであったに違いない。わたしは両親も生物の範圍を出るものでないということに極力目をふさごうと努力しつづけ、いわず息をつめていて、結局はそれを承認する他はなかった。つまり敗北した。だがその敗北は甚だこたえた。それでわたしは屈辱的自尊心を逆に刺戟された形で、何に対しても抵抗的攻撃をこころの中でやりつづけながら、道元をよんだりなんかしていたのだった。従って女に向っては決して気安い氣持の男ではなく、童貞を破って後に却って女について無智にかえったような現象さえある。女が息苦しかった。ダンサーなどというものはどれでも随分自分より年上のもの、別世界のもののように思われた。そのくせ荷風のアメリカ物語などよんで変な氣になつて眠れなかったり、リンゼイの少年審判所の記録などをよみつつ何とかしてセックスに対して平衡のとれた安静な立ち場を得ようとつとめたりした。そのわたしに、その男の問は少し残酷であつたかも知れないが、彼にとっては寧ろ無邪氣な疑問、或いは願望から出たのであることが

直ぐに判るのだった。

わたしはその男の血色のいい大きな顔をみながら、とっさに返事は出来ずにいると、その男は、

「原さんみたいに体の弱い人が僕は羨しい。僕はこんなに健康でしょう。だから、性慾には本当に悩まされる。原さんみたいな人はきっと余り性慾がなくて、女を見てもやり切れなくなることはないでしょうね」と言った。

「稲田君。そんなこというけれど、君は老木の返り花という奴をしらんのだろう」

「老木などいっても、あんたは僕より四つも年下じゃないですか」

「いや、これは例えのことだ。つまりね、木が寿命が短くなるとパアッとんでもない花盛りをやらかして、無意識に子孫を沢山残そうとするそうさ。だから案外僕のように衰弱している人間の方が無意識に子孫を残そうとする衝動が強いかも知れない。また弱いかも知れないけれど」

「弱い方が自然だと思えますね。そんな話、学校の生物学で習ったこともない」

今の人間なら老いらくの恋と簡単と早わかりするだろうが、稲田が二十二、三のわたしと老いらくの恋とをひつつけることは、例え今でも出来まい。わたしはこのようなやりとりをしながら、何か圧力を感じさされる稲田の顔を見ると、あぶらのねっとり浮んだその頬にポツリと割合大きいきびが一つ出ていた。それが大そう胸につかえるほど性慾的であった。

「モオリス・シュヴァリエの助平にきびみたいなのが、そっくりその場所に出てるね」

「それですよ。そりゃあ、出もしますよ。僕はそれでどうも原さんがうらやましいんだ。原さんは毎日すましかえって机の前に坐ったりしてむつかしいお経の本など読んでいて平氣らしいけれど、僕から見ればどうも不思議でかなわない。僕なんかはそういうなこととして休を使わずに一日ジツとしていたら夜になってうめき声を立てなければならぬ位性慾をもて余しますよ。女を知ってしまった良い男が今尙まさかアレもやれないし、兎に角やり切れない。あんた遊廊へ月に何回ほどゆきますか。それとも年に何回ですか」

こりゃあフョオドルかドミトリイかどっちかだぞ、とわたしはその頃よんでいたカラマゾフ兄弟の中の人物が眼の前に突然とび出して来たかのようにおどろいてしまった。道ばたで土方などが中休みの時に、皇后の写真など見乍ら或る願望を甚だ露骨な言い方で述べ立てて騒いでいるのを聴いた時には、その実行の場面を想像しただけでもすごいほど身のすくむ感じはしても、相手が大体下品な、それにそんなことは起りっこないなどと考えてやっと血を静めて来たものであるが、相手が稲田で、この下品でない医学士がこういう風にカラマゾフ式に露骨にやってくると、わたしはこころのかわしように甚だ難渋して思わず顔が赤くなった。

「あんなとこ一度も行ったことない」

「一度も——？ そしたら原さん、どうやって解決してるんです」

愕然としたという表情で大声を發した稲田は、感心したようにしんみりと、

「うらやましいなァ。實際うらやましいなァ。あのせめ苦がないんだからなァ」と言った。

「なる程あんなだったら強いだらうなあ」とわたしは半ば羨望して、半ば自分の冷静さに自

惚れ気味で、答えたが、すると稲田は自分がどんなに性慾が重荷であるかということをわたしに話しはじめたのだ。

「……（この部分は前に書いているような部屋の描写である）というような殺風景な室で週に五晩はどうしても寝なくてはならない。それも月曜日、火曜日はあれに逢って来たほとぼりで未だしも辛抱がゆくけれど、水曜日になるとそろそろ危くなり、木曜日、……金曜日の夜となつて来ると、段々気にもかけぬ看護婦などが部分的に気になりかけて、はっと気がつくと眼がいつも胸のあたりや腰のあたりへ自分でも判る位熱っぽくからみついているんですよ。向うも若いんだしね、そうした願望に満ちた視線にはきつく反応する。そうすると、皮膚に電氣が通うのか何か知らないが女の体が妙に艶めきをおびてきて、二人きりで同じ室になんかいると実に火花が散る前のような息苦しい氣持になつてくる。丁度雷が鳴る前の雲と地面みたいなもんですよ。こっちに陽の電圧が高くなつてくる時には向うには陰の電圧が高くなつて来何かはづみがあれば火花がとびかねない。實際そうでなくとも医者と看護婦というものはそうした火花を通す運命的なものがあるんでね。何しろ一つの仕事を共同でやっているといつの間にか少しは情が移るものだし、それでつい両方が若いと、どっちからとなしに傾いて行つてしまふ。僕など随分手の早やかた方だけれど、今は自重してるし、それに看護婦なんてものは白衣をぬがせてしまえば魅力の九十九パーセントまで無くなつてしまふ。たいして面白みやうまみの有る女なんていないものだし、またあとが繁雜だとも考えるんですがね。だから、向うはこちち全体にひかれているのかもしれないが、こっちは二つの点に集中してしまつてゐる。その二

つ、まあ一つかもしれないが、それがその時間だけ僕には必要なのだ。まあ言ったら肩の荷をそこへ下したというだけのことにはすぎない。魚の雌が卵を生んだ上に精液を流しかけて満足する魚の雄の氣持なんてものもいくら判るような氣になってくる。それ位週末に近づくと僕の腰は重く充実してきてどうにもやり切れなくなってくる。ひたすらその腰の重味を放射して身を軽くする穴をさがしたくなってくる。だから、看護婦の腰ばかりに眼が行ってしまう。眼をそらしていたって、ところが電氣の放射のようにそこへ集中して行くから向うには判るし、お互に照れくさい話みたいなものだ。ところが僕はその腰しかいらぬんだが、悪いことに腰には手も足も胴も頭も、尙悪いことには心までくっついていて切りはなすわけには行かないんでしよう。だから、僕はそこを辛抱しておじきって了う。夜は酒は却って危いので睡眠薬などで適当に眠り、一日一日の針の蕊をふみこえて行くというわけで、こんなことおそらく原さんには判らない苦しみでしょうね。さて土曜日になると苦しさの絶頂、やっと午後二時ごろ身体が空くと、もう考えることはあいつのことばかり、それもあいつの下半身しか頭に思い浮ばぬのですよ。早速一分もおしく駅にかけつけ電車に乗る。そして行きつくまでの五十分位の間の苦しさと言ったら、息詰るような苦しさというけれど本当に息が詰ってくるものね。性慾が、もうじき満足さされることに気づいて、体中あばれあるき、肺も心臓も脳髓にまでふくれ上ってきて、体は端という端に向って血が走るような感じで、ひどい時には腰のあたりに激しい痛みさえ感じるというていたらく、何とも苦しくて窓の外の景色なんか往きにはろくに目にうつたためしもない。駅を出るとあいつの下宿までかけ足だ。かけつけなくては居れない氣持も氣

持、また変な話だけれど腰のあたりがゆっくり歩くわけには行かぬような様子にまでなってしまうからでもあるしね、電車の動揺は全くあのような気持と体の状態との時にはひどくききめがあるんだね、酔いをゆすぶるだけではないよ、性慾もひどくかき立てるんだ。——そして下宿へつく、格子戸をがらりとあける、眼はちゃんとあいつが居るのを履物でちゃんと確認する。必ず居るのは判っているのだが、見ずにはすまぬのだ。丁度そうだ、支那馬のオンがメンの糞を必ずかいで見えて、その上でできりきりまいするようなものですよ。その時馬は必ず変なかおをして首をひんまげ切って、下目を使って白目を出して笑うものだが、きっとその時の僕の顔も変にゆがんでいるに相違ないね。けだものも一緒だね。それから、靴をぬくなり一足とびのようにあいつの室の前までかい段をとび上る。戸をガラッとあけると、あいつをおし倒して、こうしてこうしてこうしてこうだ。（彼は両手で女の着物の裾をひらき長襦袢の裾をひらきという恰好を実に激しく早く描写してみせた。生々しいすさまじい感じと、何か悲痛なものがそこにあった）そうして、やっとすませると……それから始めて物を言うような訳になるんですよ。つらいもんだ、一週間の禁慾というやつは。……」

その時わたしは稲田のつらさをまるで自分の体験のようにはっきりと体験したのだった。それはエロ本などで見えるようなセックスではなく、もっとせっぱつまった暴力におしながされてゆくような、余りに自然すぎて悲しい、むしろところが千々に裂かれるような痛みと、人間のあわれさを、厳肅といって良い位のきびしさでわたしに味わせた。

キリストの神を怖れない暴逆な日本兵に向ってのわたしの哀憐という気持はこの体験に根柢

をもった氣持であつたのだつた。

2

そののち、わたしは満州の日本兵士について、また、宇品の日本兵士について聞いた。それも余り話としては愉快なことではなくわたしのころの中に憂鬱の種子のようなものを残した。それは被害者が加害者と同じ国民であり、尙且つ加害者に対して善意をもつて行動したために、わなにはめられたのであるから、非常に後味が悪かつたのであつた。

満州の或る大都會の街中で、或る午後のこと満鉄に勤めている人の奥さんが四、五人の日本兵からよびとめられた。外出で出たので、花街のあるところを教えてくれないかと言うのだ。困つたことに道のりも少しあり、道順もごてごてして、都會なれぬその兵卒たちには一寸説明するのも難しいという状態であつたのか、又は兵卒たちのあらかじめたくらんだ巧知がその人妻をやすやすと導いたのかは判らないが、当時日本人は、殊に婦人は日本軍將兵を信ずること甚だ厚かつたし、その傾向は外地では尙更のことであつたと思われるから、全く自然にこの人妻はその兵卒達を花街まで道案内するという風なことに話がきまつてしまった。いくらかこの人妻が輕はづみな女であればいっそこちらの氣持も助かるのだが、兎に角その人妻は内地の話やら戦争の話を幾分は浮き浮きした氣持で兵卒達と交わしながら、その話のとり交わしが、兵卒達のしこりにしこつた腰の重みを（わたしはその時土曜日午前の稲田の腰を思